

# 金は天下で回すもの



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化プロデューサー(地域活性化伝道師)・場所文化機構代表

1959年帯広市生まれ。米国に留学中に、ベンチャー企業(東京)にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーのセールスプロモーションを担当。86年に地元・帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台(帯広)、フィールドカフェ(十勝)、場所文化フォーラム(東京)、とかちの…(東京)、にっぽんの…(東京)などの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立等に関わる。現在も、全国各地を飛び回り、地域づくりの講演、企画・提案、実践を行っている。

ぴよんぴよん跳ねるうさぎ年だからということではないが、新年を迎え早や1か月が過ぎた。正月の遊びといえば、今はテレビゲームやカラオケが主流のようだが、私が子どものころは<sup>たみ</sup>凧揚げ、コマ回し、羽根つき、すごろく、福笑いを楽しんでいた。縦に長い日本列島は地域ごとに気温も大きく異なるので、厳寒の北海道の正月に無理して外で凧揚げをすることはなかったと今は思うが、素直だったというか、バカ正直というか、テレビから流れてくる滝廉太郎作の「お正月」を聞き「凧揚げとコマ回し」で遊ばないと、正しいお正月を過ごせないと思いついていた。

その凧揚げの歴史は古く、千年以上も前に中国から伝来した。当初は占いや遠くの人への連絡手段として使われていて、私たちがなじみ深い四角い凧は江戸時代からのもの。もともとの中国凧は鳥や虫の形を模していて、漢字では紙のトンビで「紙鳶」と書く。そのまま「しえん」だが、実は「いかのぼり」と読み、凧のこと。この言葉は俳句の季語なのでその道の人は知っていることだが、「たこ」がもともとは「いか」と呼ばれていたというのはまさにギャグみたいな話でにわかに信じ難い。しかし、元禄期(江戸時代)に大阪で人気のあった浮世草子に「少年の時は花をむしり紙鳶をのぼし」という行があり、1655年には幕府が「いかのぼり禁止令」を出したというから本当なのだろう。そして「いかのぼり」を禁止された江戸っ子が「てやんでー、これはイカじゃなくてタコだ」と言ったのが「凧」の始まりだという。ちなみに、日本一大きな凧揚げは、国の無形民俗文化財にも指定されている滋賀県東近江市の「八日市大凧祭」で、今も、面積100畳、重さ約700キロの大凧を揚げている。

## 凧揚げから生まれたフランクリンの発明

形は異なるが、凧揚げは世界中で楽しまれている。今から250年も前のことになるが、その凧揚げに魅了され、命までかけたという人物が米国にいた。その名はベンジャミン・フランクリン。米国の独立宣言の起草に関わり署名した5人の政治家の一人であり、米国

の100ドル札に肖像画が描かれている超有名人物。一代で事業を大成功させ、米国を代表する富豪となるが、同時に科学者、作家、慈善家、発明家としても活躍した。彼の発明は私たちの生活に身近な存在だが、何とこれらの発明は大好きな凧揚げをするための工夫だったというから面白い。雷の日も凧揚げの練習ができるようにと避雷針を考案し、椅子に座りながら凧揚げをしたいという横着な考えからロッキングチェアができた。遠近両用メガネ（二重焦点レンズ）も彼の発明で、遠くの凧と近くの凧糸の両方をよく見ることが出来る便利なメガネが欲しいという理由から考え出した。サマータイムも彼の発案で、当時は採用されなかったが、日の長い夏に時間を早め、仕事を少しでも早く終わらせ凧揚げをしようという魂胆。彼は合衆国憲法制定にも関わったが、凧揚げを米国の国技にという提案までしていたという。「好きこそものの上手なれ」「必要は発明の母」という言葉があるが、人は、好きなこと、楽しいことをやっている時に最大限の能力を発揮できるということを彼が証明してくれている。

### 時は時なり、金はカネなり

実は「Time is money」も彼が生みの親。もとはギリシャの言葉で、英語では「Time is precious」とされていたものを「Time is money」と書き換え著書に掲載し、それが主流になったといわれている。日本のことわざの「時は金なり」はその言葉を直訳したもので、時間にはお金と同じような価値があり、無駄にしてはならないという意味。確かに、お金も時間も貴重であり、大切に使わなければならないが、彼が活躍した時代と今ではお金の質や役割が大きく変わってしまった。マネーゲームで暴走する現代のお金はパワーこそ増したが、すでに「時」と同じ価値はない。ミハエル・エンデの「モモ」も変質するお金への警鐘であり、使わないと減っていくマネー（地域通貨）の取り組みも、その真意はお金の質を元に戻し、地域の豊かな関係を再構築することにあった。「金は三欠くにたまる」という言葉もあるが、「義理」「人情」「交際」

の三つを欠いて私財を貯めたとしても幸せにはなれない。お金は貯めたり、預けたり、増やしたりできるが、時間はその人に与えられたかけがえのないものであり、命そのものともいえる。止まることなく流れ続ける時間は、貯蓄することも交換することもできない貴重なものであり、あえて言うなら「時は時なり、金はカネなり」だと私は思う。

### 金は天下で回すもの

今回はことわざを中心に書いてきたが、最後にもう一つお金に関する言葉について考えてみたい。それは「金は天下の回りもの（回り持ちともいう）」。環境問題でしばしば話題に上る江戸庶民の生活は、何一つ無駄にしない理想的なエコライフだったといわれているが、その江戸っ子はお金を「おあし（お足）」と呼び、入ってきたお金だけではなく、入ってくる予定のお金までも使っていた。味噌や米、醤油などもツケで買い、年末に清算するという話が落語に出てくるが、まさに「宵越しの金は持たねえ」という消費優先生活。景気を良くするにはお金をどんどん使って回すことが必要だといわれているが、そうだとしたら、江戸っ子の金銭感覚も一つの教えだと言える。しかし、日本人には子供のころに読まれたイソップ寓話の「アリとキリギリス」の教訓が染みついており、コツコツ働き、決してぜいたくはせず、まさかのために蓄えることを美德としてきたので、いきなり江戸っ子のようにとか、キリギリスの生活といわれても簡単には変わらない。

いずれにしても、ただ待っていてもお金は回ってこないのだから、自分たちから率先して使っていかなければならない。要するに「金は天下の回りもの」という“他力”ではなく、「金は天下で回すもの」という“自力”的アクションが必要だということ。本当に重要なのは、いくら使うのかではなく、何に使うのか。それが文明消費型社会から文化消費型社会へのシフトであり、時の経過とともに発酵・熟成するモノづくりである。徐々にではあるが、そういった活動が全国各地で始まってきている。